回復期リハビリ病棟における便秘の改善への取り組みとその効果

星野 瑞紀子[1)]　長谷川 澄江[1)]　大工原 志保[1)]　竹政 香純[1)]　渡邉 美鈴[1)]
谷崎 義生[2)]　美原 盤[3)]
1)公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 栄養サポートチーム コンチネンス部会
2)公益財団法人脳血管研究所附属美原記念病院 脳神経外科
3)公益財団法人脳血管研究所附属美原記念病院 脳神経内科

[はじめに]便秘は、患者にとって苦痛を伴うものであり、自然排便に対する患者のニーズは高い。また、介護者にとっても介護負担軽減の観点から便秘の改善に向けて取り組むことは重要である。我々は、栄養サポートチームのコンチネンス部会の活動として便秘の改善に取り組んだ。今回、その実際と結果について報告する。

[対象および方法]対象は、平成 29 年 4 月から平成 30 年 3 月までに回復期リハビリ病棟に入棟し、便秘の改善への取り組みに同意した患者 66 名とした。対象患者には、便秘の改善マニュアルに則り①必要水分量の算出、②必要水分量×1.5 を目標とした水分摂取、③離床、④便秘体操、⑤ツボ押し、⑥腹部マッサージ、⑦朝食時のオリーブオイル摂取を実施し、上記の非薬物療法で効果が得られなかった場合、薬剤使用を検討した。また、チーム介入前後で、対象患者に対し、アンケート調査を行なった。

[結果]対象は、男性 32 名、女性 34 名、平均年齢は 71.8±12.5 歳であった。チームによる介入日数は平均 20±14 日であった。アンケート結果では、「薬を飲んでいる」と回答した者の割合は介入前後とも約 65%で変化はなかった。一方、「症状の程度」は、介入後に「改善」が 85%、「維持」が 11%、「悪化」が 4%であった。

[考察]チームによる介入は、薬剤使用中止にさほど効果はなかったが、便秘の随伴症状改善に効果があることが明らかになった。今後はさらに一つひとつのケアの効果を明らかにしたい。